

目 次

第54回金沢大学暁烏記念式・記念講演	
暁烏敏の意義（講演要旨） 松田章一	2
暁烏敏没後50年記念「暁烏敏展」開催	6
NACSIS-IR機関別定額制接続方法	7
図書館のトピックス	
新入生図書館オリエンテーションを実施	8
外国人留学生オリエンテーション	8
新入生のための図書館見学会	8
定例説明会・昼休み説明会	9
新着雑誌コーナー等を移動	9
留学生用母国語OSパソコンを設置	9
本学教官著作等寄贈図書リスト	10
としょかん日誌（2003年3月～5月）	10



第54回暁烏記念式で挨拶する林勇二郎学長

第54回金沢大学暁烏記念式・記念講演

暁烏敏の意義

松田 章一

第54回の金沢大学暁烏記念式・記念講演は平成15年4月26日(土)午後1時30分より金沢大学サテライト・プラザ(金沢市西町教育研修館内)で挙行された。記念式典では、和田敬四郎附属図書館長、林勇二郎学長の挨拶に続いて暁烏家当主である暁烏照夫氏より挨拶があった。記念講演は、暁烏敏研究の第一人者である松田章一氏(金沢学院短期大学教授)を迎え、「暁烏敏の意義」と題して行われた。市民の方を中心に約100名の参加があり、盛況のうちに終了した。

講演要旨

「暁烏敏の意義」などと大げさな表題を掲げましたが、実はそれを考えるのが私の生涯の宿題であります。

群盲象を撫でる例えのように、自分の知っている暁烏敏なら、先生に出会った人それぞれにあるでしょうが、暁烏敏その人の全体となると、まだまだ資料収集をしなければならないのであります。多くの場合、自分に引き寄せて理解しようとするので、自分の見える範囲や、そうあってほしいという見方で暁烏敏像を作ろうとするものです。致し方のない事ではありますが、それでは「私の暁烏」ということになってしまいます。それ故、勝手に決め付けた先生像を作らないためにも、あるかぎりの先生に関する資料が必要なのであります。

そこでまず最初に、現在どれほどのことが分かっているかということから述べてみたいと思います。

基本資料としては、『暁烏敏全集』二十六巻があります。

しかし、「全集」といいながらその編集方針は「選集」でしかありませんでした。先生の著作は大体半分ほどしか載せていません。これは理由のないことではなく、売れるか売れないか分からな



い個人出版で、最初は十八冊を、聖典編、思想編として編集したのです。とても全てを網羅するわけにはゆきませんでした。先生を知るための重要な著作がかなりぬけております。特に青年時代と浩々洞時代と昭和前期の戦争時代が少ないのです。

たとえば、北安田パンフレットという文庫本くらいの出版物が六十冊ありますが、全集に収録しているのは二十冊だけあります。また、先生の講話速記の翻刻されないままのノートが残ってまして、講話数にするとなんと千回分ほどありま

すが、九割九分は速記録のままですから載せていません。

この編集は、先日なくなられた西村見暁、秘書の野本永久、他に崇信学舎の人々があたりました。その後、私が生活編を編集しはじめたところ膨大な著作が埋もれていることがわかり始めたのですが、その時点ではもう刊行が始まっていたのでどうすることも出来ず、全著作の著作刊行年表を作らせてもらいました。別巻が旅行年表と著作刊行年表になっています。その著作刊行年表には、全集刊行当時現在で調べた全ての書簡・原稿・著作・出版を載せています。約八千編の著作数です。全集に載せたものと載せなかったものが分かるようになっていきます。

書簡も全集に載せたものだけを書きましたので、後何千通あるか分かりません。全集の編集都合上、明達寺にあったものだけで編集しました。明達寺にあるという事は自分の母や妻に宛てたものだけです。全国の信徒や友人宛のものは一体どんな数になるか、残っているのかいないのか見当もつきません。

また、先生は克明に日記をつけた方ですが、これも全集ではその日記のごく一部を使用いたしました。幸い昭和五十二年に「暁烏敏顕彰会」が『暁烏敏日記』上下二巻を刊行していただきましたので、日記はだれもが読めることになりました。そこに出ている書簡往復欄に見える先生の投函された書簡は、何千通か何万通か、まだ勘定していません。当然その時は捜し出している時間はありませんでした。

先生の書かれたり話されたりしたものを第一次資料といいます。しかしこれだけでは先生を知ることには出来ません。手紙にしても先生の出されたものだけでは片手落ちで、相手からの返信があって初めて全貌がわかるものです。こうした第二次資料が必要なのであります。これが研究のためにはぜひ必要です。

第一次資料は「点と線」であります。今の全集は「点」の範囲で「線」には至っていません。第二次資料が加わると「面」になります。これに時代のうねりを加えると「立体」となり、暁烏敏像がおぼろげながら生まれるのであります。

悲しいことには、現在の暁烏敏研究は、完全で

ない全集という「点」と、「時代のうねり」、社会情勢だけで作り上げられていますので、私心が加わっているといえないことはない。五十回忌の年を期して、なんとかさまざまな資料を集める手立ては出来ないかと思っています。

今度の金沢大学の暁烏記念式・記念講演のレジメに書きましたように、暁烏敏の仕事を、私としては三つに分けてみたいと思っています。

その一は、禁書であった親鸞の『歎異抄』を初めて世に広め、仏教の近代化に尽くして清沢満之の信仰を伝え、仏教雑誌『精神界』を執筆し、編集した明治時代。

その二は、自己の性欲の懊悩の中から、独立者としての人間の解放を課題とし全国を行脚して語った大正時代。

その三は、世界の宗教と哲学と文学とを涉獵し、自らも世界を旅し、大衆とともに戦争や戦後の苦悩を体感しつつ、「浄土」としての国家の在り方を求めた昭和時代。

明治期の意義を、歎異抄と清沢満之の信仰を伝えたとしましたが、私は後者により深い意義があったと思っています。宗門からの歎異抄の解放も重要な仕事でありましたが、歎異抄を借りて清沢先生の信仰を伝えられた意義の方が大きいと思うからであります。その舞台が雑誌「精神界」であったことは周知のことです。暁烏敏は清沢満之の直弟子中の直弟子で、その生涯は清沢満之の讃仰のためにあったということをご自分でも言っておられます。清沢満之像を拜む暁烏敏像が収められているあの臘扇堂が全てを語っています。

しかし、暁烏敏の明治期の信仰は恩寵主義といわれ、仏と我とが二分されていて、救う者と救われる者の二者がいるという信仰で、二元的でありました。

大正時代の暁烏敏は、恩寵主義的信仰はまがい物であることに気づかされる壮絶な事件が起こります。奈落の底にたたき落とされるような事件であったのに、不死鳥のように蘇生します。その壮絶な体験が、『更生の前後』『独立者の宣言』『前

進する者』の三冊、いわゆる更生三部作に記されているのであります。独立者という言葉が象徴するように、人間解放が高らかに語られ、徹底的に自己がさらけだされるのであります。本当の意味での清沢の言葉が、暁烏の身体を通して語られたといえるでしょう。

昭和時代の暁烏は、「浄土」という課題を背負ったと思います。実は暁烏門下も、その他の研究者も戦争中の暁烏にはきわめて否定的であります。戦争責任をあげつらう人が多いことも事実であります。『暁烏敏全集』にも、戦時中の著作のほとんどを入れてありません。それは先生は戦争責任者であってほしくないという思いが、あったからでもありましょう。それはともかく、昭和時代は人間の住む場所、「浄土」としての国家の在り方を求めた時代であったと思うのです。

そういうことで私は、「暁烏敏の意義」を明治時代は宗門の解放、大正時代は人間の解放、昭和時代は国土の解放が、暁烏敏の格闘であったと考えているのであります。

本日は、そういうことを全部話す時間ありませんし、先程から申しますように、まだわからないことが多いので、現在調べている大正時代の一部分にしぼってお話することにいたします。「大正九年の暁烏敏」について触れてみたいと思います。

レジメには「大正時代には、自己の性欲の懊悩の中から、独立者としての人間の解放を課題とし、年の三分の二は全国を行脚して信徒たちに語った」と記しています。

そもそも暁烏敏を嫌う人は、「自己の性欲の懊悩」という言葉が耐えられないようです。宗教家がなぜ秘められた性欲をあからさまに語るのか、というわけです。性欲は下半身であり、宗教はもっと崇高なもので精神の問題だと考えているのでしょう。先生も「性欲」なんていうからいけないので、愛とか恋とかいっておけばもう少しきれいに聞こえたでしょう。しかし暁烏は戦っていたのです。あえて「性欲」などと聞きにくい言葉をつかって、挑戦しているのです。

普通、暁烏の回心は、大正四年のいわゆる「更

生の前後」事件であるといわれています。そのことを世間に公開したのが、『更生の前後』という本で、大正八年に出版されますが、暁烏のなかでは大正四年から五年に決着がついていました。あるいはもっと早いのかも知れません。

大正九年という年は暁烏敏にとって、再びこの信仰が検証される年でありました。つまり彼の信仰の確かさを、自分自身に再び問わなければならなくなった年でありました。

大正九年は、原谷とよとの恋愛事件が表面化した年であります。

この恋愛事件は、単に性欲に懊悩するといったものではありません。暁烏敏にとってはあらゆる倫理道徳、家族愛、夫婦愛、そんなもの全てに対して、自分の態度を検証し、そういう微温湯的なものに懊悩する自分そのものを解放する壮絶な戦いでありました。

相手の原谷とよは、小松市に生まれ、県立高女から奈良女子高等師範を卒業、小松実科女子学校で国語と音楽を教えていました。大正八年に北安田を尋ね、秘めた恋が始まります。今風に言うと不倫です。片や全国に名の知れた暁烏敏、片方はうら若き知的な美貌の女学校の先生です。この時暁烏四十三歳、原谷とよ二十四歳です。二十歳の年の差がありました。妻の総は二十六歳です。二人の恋が表面化したのは、大正九年九月、原谷の両親が暁烏からとよにきた手紙を読んだからです。その中に「男の子が生まれたらなんと名づけよう、女の子ならばなんとしよう、養育費はどうして、それを機会に二人の間を公にして」と書いてあったのです。これには父親も母親も仰天しました。九州を旅していた暁烏に父母から怒りと抗議の手紙が出されています。

暁烏がとよの父と母の抗議文を読んだのが大正九年九月二十九日、九州鹿児島県志布志の金剛寺という寺でした。この晩暁烏敏は、とよの両親に自分の気持ちを洗いざらいのべた手紙と、妻総には二人とも好きなのだから理解してほしいと書き、とよに宛ても書きました。

現在は妻総に宛てた手紙しか残っていません。両親宛とよ宛てのものは多分破り捨てられたと思われる。総に宛てた九月二十九日の手紙の全文は、『暁烏敏 世と共に世を超えん』の中で公

開しました。

受けとめ方にもよると思いますが、人間の心の奥底には紅蓮の炎のような思いを抱えているでしょう。恋におちいった者は暁烏や原谷とよでなくとも、我々もまた一緒でありましょう。真実の恋には甘さなどというものはどこにもありません。

恋とは切羽詰った選択が必要です。私を選ぶのか選ばないのか。なぜ選ぶことを躊躇するのか。一瞬一瞬が、命を、魂をかけた選択です。そして、選ぶとすれば、自分に取りついている倫理や道徳、しがらみや利害、親子の恩愛、家族の将来や評判が、障害となって高く厚い壁としてあらわれます。だから止めるのか、取るのか。道徳や倫理の立場では、当然選択なんかできないでしょう。しかし三人は選択したのです。

超える苦しさ、喜ばしさ。超えたと思ってもまたあらわれるのです。清沢先生が「生きてゆくことも死んで行くことも出来ない」といっていますが、まさに立往生です。そういう生死巖頭に立ったとき、人はどのように選択するか。そういう問いを突き付けられていたのです。

しかし、暁烏はその時期、恋に悩んでいただけではありません。暁烏という人物を調べてみると、普通ではないなあと思うことがよくあります。こんな激しい恋をしながら別の面では実に冷静な部分をもって生きているということです。

当然といえば当然ですが、この年も実に冷静で戦闘的に生きているのであります。

各地の講演では、名前は伏せたもののとよとの恋を昂然と語りました。そのため「至る所少数の共鳴者と多数の誹謗者とを得ています」という状況でありましたが、ひるむことはありません。

また、この両親の手紙が引き金になって、暁烏は九月に、高光大船、藤原鉄乗らと出していた同人新聞『汎濫』から身を引きます。というのも、前年信徒の一人の女性から多額のお金を頂き、それを資金にした個人出版を決意しているのです。毎月一冊出そうと思い、その原稿を用意はじめています。第一輯の『生きる日』は、とよと妻ふさとの「愛の三角関係」の公表をしようというも

のでした。大正十年一月から「にほひくさ叢書」として、実に一年間で五冊の単行本が北安田から出版されるのです。その外『独立者の宣言』『前進する者』の二冊も別の出版社から刊行されています。

さらにまた、墨衣墨袋事件というものもあります。色鮮やかな衣や袈裟をつけず、黒一色で、寺の最大の行事である報恩講を勤めるといって近隣の寺々の僧侶を招待したのだから、ほとんど誰も来ず、暁烏一派の僧だけで勤めるという年でありました。権力に真っ向から対抗したのであります。

石堂清倫という人がいます。松任の人で、北安田の日曜学校に通ったこともありました。小松中学から四高に進み、東京帝大を出、戦前の日本共産党に入党します。二年ほど前に亡くなりましたが、『わが異端の昭和史』という著作がありまして、その冒頭の一章にこの時期のことが書いてあります。こういうのが第二次資料でして、周辺がよくわかります。それによると中野重治も大正十年北安田の夏期講習会に来ていたことがわかります。中野重治は暁烏より藤原鉄乗と話がかみあったようです。大体「愚禿社」は当時金沢でもっとも急進的なアナーキーな結社でありました。四高生、医専生や近隣の目覚めた青年たちが集まっていました。犀川の新橋詰めに愚禿社はありました。新橋の橋の上には刑事が見張っていたとは高光大船の息子である高光一也、藤原鉄乗の娘の藤原利枝の話されているところでもあります。また、原谷とよの弟の原谷俊二郎の友達で、後に芸術小劇場を主宰する演出家劇作家の北村喜八も北安田に行きました。北村の手紙などは石川近代文学館にありますので、やはり大切な第二次資料となります。

金沢大学の宮本又久先生の論文「暁烏敏と石川県民衆文学」などの論文もいろいろなことを知らせてくれます。暁烏敏の信仰に触発された金沢や、石川郡の青年たちへの影響により沢山の文集や同人雑誌が出ていることもすでに調査されています。それらの人々の日記や著作、また雑誌を調べねばなりません。

そういう訳で、どこから暁烏敏の資料が現れるかわかりません。いずれは誰かが調査されることを期待し、さらにお願ひできれば、お手元にある先生の関係資料を散逸しない先に、金沢大学図書

館にご寄贈頂きたいというお願ひを申し上げて、尻切れトンボではありますが、本日のお話を終わりたいと思います。

暁烏敏没後50年記念

「暁烏敏展」開催

今年は暁烏敏の没後50年にあたります。この記念すべき年を寿ぐために附属図書館と資料館の共催で、記念展を開催しました。場所は金沢大学資料館展示室、期間は、4月26日の第54回暁烏記念式・記念講演の前後に設定して、4月7日から5月30日までとしました。開館時間は午前10時から午後4時まで、土、日、祝日は閉館しました。

展示品は大きく5部門に分けました。第1部は著作、日記、草稿を中心に年代順に展示しました。自筆物の多くは今回初めて公開されたものです。14歳の時の「和歌名林集」、17歳の日記「白駒日記」から77歳の時の「世と共に世を超えん」まで、99点。それぞれ解説を付しました。第2部は書家としても評価の高い暁烏敏の書軸17点を展示しました。これらは、一昨年東京の大橋和臣氏から寄贈されたものの一部です。



第3部は暁烏文庫の貴重書の中から紺紙金泥経、タゴール自筆詩句など5点を展示しました。第4部は資料館所蔵の暁烏陶磁器コレクションから外国旅行の蒐集品12点、国内陶磁器の名品5点を展示しました。第5部は扁額、色紙、短冊、その他として、「汝自当知」の扁額、清沢満之7回忌に作られた軸装の「清沢満之肖像」、畝村直久作「暁烏敏胸像」、暁烏文庫蔵書票および蔵書票の元となった自筆の書軸など28点を展示しました。また、暁烏敏の生涯が展望できるよう年表を製作し掲示しました。展示目録は手製で150部作製しましたが、追加注文を受け結局300部作製しました。残部はありません。

入場者は、学生525名、教職員63名、一般市民143名、計731名でした。

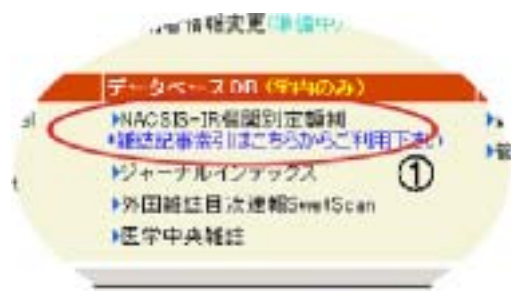
NACSIS-IR 機関別定額制接続方法

～ 科学研究費補助金成果概要データベースを例に～

4月よりNACSIS-IR機関別定額制サービスを開始いたしました。これは、国立情報学研究所の情報検索サービス（NACSIS-IR）で提供されているデータベースの一部（学位論文索引DB、雑誌記事索引DB、経済学文献索引DBなど81のデータベース）を金沢大学内のLANに接続している端末から自由に利用出来るサービスです。

サービス開始に伴い、科学研究費補助金成果概要データベースを例として、NACSIS-IR機関別定額制を利用したデータベース接続方法を紹介いたします。

1. 附属図書館のサイト（<http://www.lib.kanazawa-u.ac.jp/>）から「NACSIS-IR機関別定額制」() をクリックする。従来の利用方法でNACSIS-IR利用された場合には規定の料金が発生します。機関別定額制のページから接続してください。



2. 「NACSIS-IR機関別定額制」のページが開くので、「NACSIS-IRへの接続 Web Front 日本語」() をクリックする。



3. 「処理選択メニュー」から「1. NACSIS-IR」() をクリックする。



4. 「データベース選択」画面で、データベースID1「科学研究費補助金研究成果概要データベース」() をチェックし、「選択実行」() ボタンを押す。



以上で科学研究費補助金研究成果概要データベース検索画面に移ります。画面の指示を見て検索してください。課金はされませんので、存分にご利用ください。

5. 検索が終了したら必ず処理選択メニュー画面で「99. ログアウト」を実行してください。

図書館のトピックス



新入生図書館オリエンテーションを実施

4月8日(火)学部新入生約1,900名、9日(水)養護教諭特別別科24名全員が、15教室に分かれて、図書館(中央館)を積極的に利用できるよう図書館スタッフから利用方法の説明を受けました。



外国人留学生オリエンテーション



4月8日(火)日本語のほか、英語・中国語の各通訳により、利用についての説明と施設見学や機器操作を興味深く見聞していました。



学部・学科単位毎に分かれた会場で、自らの体験をふまえて説明する若き図書館スタッフ

新入生のための図書館見学会



4月9日から15日までの昼時間に実施しました。今年は211名が参加。昨年に比べ2.2倍と関心の深さが感じられました。

定例説明会・昼休み説明会

定例説明会として、「館内ツアーとOPAC検索」、「論文（雑誌記事索引）検索と新聞記事検索」を各4回、昼休み説明会「OPAC検索」、「日本語論文検索」、「英語論文検索」を各5回実施し、参加者からは大変役に立つと好評でした。



OPAC 説明会 4月21日～25日



日本語論文検索 5月12日～16日

新着雑誌コーナー等を移動



このたび、雑誌専用書架を設置し、新着雑誌を利用しやすいよう、サービスカウンター前に移動しました。これに伴い、目録カードコーナーは、西側玄関を入ったエントランス（元の喫煙コーナー〔廃止〕）に移しました。

なお、館内は全面禁煙となりました。

また、新着雑誌コーナーの展示雑誌も増やしましたので、お気軽にご利用ください。



留学生用母国語OSパソコンを設置



中国及び韓国の現地から輸入したそれぞれの母国語によるWindows版OS搭載のワープロソフトが利用できるパソコンが、留学生課から提供され、これにより作成したデータは帰国後も使えると留学生からは好評を得ています。

（写真は、左が韓国語OSパソコン，
右が中国語OSパソコン）



ありがとうございました
本学教官著作等寄贈図書リスト
(2003年4月寄贈受入)

森田幸夫(経済学部非常勤講師) 訳
悪い習慣
玉川大学出版部, 1998.8
<302.53:B966 図開架>

藤曲哲郎(理学部教授) 著
確率過程と数理生態学
日本評論社, 2003.1
<417:F961 図開架>

野口昌邦(医学部助教授) 著
乳癌・リンパ節郭清と
センチネルリンパ節生検
協和企画, 2000.3
<WP870:N999 医図書>

野口昌邦(医学部助教授) 著
Breast Cancer
[前田書店]
<WP870:N778 医図書>

城戸照彦(医学部教授) 執筆
中小企業の安全衛生を創る
労働調査会, 2002.4
<498.8:N719 医保図書室>

小山善子(医学部教授) 共編
神経心理学の源流 - 失行編・失認編
創造出版, 2002.9
<493.73:S556 医保図書室>

ご著作はぜひ図書館へ

ご寄贈ください。

としょかん日誌(2003年3月~5月)

- | | | | |
|-------|---|-------|--|
| 3月5日 | 第1回NII国際シンポジウム
(国際連合大学) 山下洋一(事務部長) 出席 | 4月24日 | 第54回北信越地区国立大学図書館協議会
~ 25日(新潟市) 和田敬二郎(図書館長), 山下
洋一(事務部長), 牧村正史(情報サー
ビス課長) 出席 |
| 3月6日 | 法人格取得問題に関する附属図書館長懇談
会(第6回)(東京大学) 和田敬二郎(図書
館長) 出席 | 4月26日 | 第54回金沢大学暁烏記念式・記念講演(金
沢大学サテライト・プラザ) 記念講演
「暁烏敏の意義」 講師: 松田章一氏(金
沢学院短期大学教授) |
| 3月10日 | 第15回資料保存フォーラム(国立国会図書
館) 林裕紀子(資料サービス係), 池上佳
芳里(図書情報係) 出席 | 5月14日 | 情報システム統一研修「第43回情報システ
ム基礎コース」(九段合同庁舎) 伊川麻里
子(雑誌電子情報係) 受講 |
| 3月11日 | 「電子ジャーナル・ライセンスの動向
について」講演会(学術総合センター) 村
田勝俊(相互利用係長) 出席 | ~ 16日 | |
| 4月7日 | 没後50年記念暁烏敏展(資料館と共催, 資
~ 5月30日 料館展示室) | 5月28日 | 平成15年度国立大学附属図書館事務部課長
会議(東京医科歯科大学) 山下洋一(事務
部長), 鈴木太郎(情報管理課長) 出席 |
| 4月8日 | 平成15年度学部新入学生図書館オリエン
テーション | 5月29日 | 第24回EDCセミナー(名古屋大学) 野村
洋子(参考調査係長) 受講 |
| 4月11日 | 総合科目「大学図書館への招待」開講 | ~ 30日 | |

金沢大学附属図書館報「こだま」第150号

発行: 金沢大学附属図書館 編集: 広報委員会
〒920-1192 金沢市角間町 電話(076)264-5200
ホームページURL <http://www.lib.kanazawa-u.ac.jp/>
電子メールアドレス etsuran@kenroku.kanazawa-u.ac.jp

2003年7月1日発行
印刷: 活文堂印刷株式会社

読者の皆様からのおたよりをお待ちしております。